

私は森林女子

西田 由里子 大阪府堺市 六十五歳

猫の額ほどの庭の手入れに飽き足りず、緑地公園のボランティアに応募した。年配おばさんの「公園デビュー」である。

子どもたちやファミリーの自然観察や野外体験のサポートが主な活動だが、年甲斐もなく公園の森林整備に手を挙げた。森林班はボランティアとはいえ、慣れた男性ばかりで、自前の斧やノコを腰に結わえた一端の職人さんである。

初めに下草刈りの指導を受ける。草いきれと噴き出る汗とで結構な重労働である。一時間もすると腰が痛い。が志願したからには根を上げられない。「おばさん、休み休みやりなよ」と声をかけてくれる優しい男衆たち。

ひと仕事を終えて昼の休憩。弁当を食べながら、山や木の話をしているのは楽しい。私も若作りの声で会話に交じる。「おばさんのおかげで、華やいでええわ」と気遣ってくれる。

間伐の時は男衆のチェーンソーが唸りを上げる。ザザッと狙った場所に倒れて行く。惚れ惚れする光景だ。私も男衆に教えてもらいノコギリで切る。先に受け口を作り少しずつ挽いていく。目算した方向にドーンと倒れた。なんと爽快なことか。カットした受け口は記念に貰って帰った。夫は「何だ、そんな物」と笑うが私の宝物である。

今朝も日の丸弁当を、リュックに詰めて出かけて行く。人には言えないが、「私は森林女子」と一人満足している。